

# 松戸市 図書館整備計画審議会会議録

平成 2 7 年 度 第 3 回

平成27年度第3回 図書館整備計画審議会

○平成27年10月19日（月曜日）

○出席委員

常世田会長 大串副会長 柳澤委員 森委員 澤谷委員 鈴木委員

○傍聴者 6名

○市側出席者

教 育 委 員 会	
伊藤教育長	
<教育企画課> 宮間課長 小泉主任主事	<社会教育課> 嶋野課長 町山専門監 白鳥主査 齊藤主事
<図書館> 中川館長 山田補佐 長谷川主査	<生涯学習推進課> 鈴木課長

街 づ く り 部
<街づくり課> 渡士主査、久保主任主事

○次第

1 会長挨拶

2 議事

(1) 「人口40万人都市の図書館における比較について」

～柳澤委員におけるプレゼンテーション～

(2) その他

◎開 会

**事務局** ただいまより平成27年度第3回図書館整備計画審議会を始めさせていただきます。

本日の審議会は、松戸市情報公開条例に基づき、公開の対象となっております。本審議会を公開としてよろしいでしょうか。

(「はい」の声あり)

**事務局** 傍聴についてご報告いたします。

本日の図書館整備計画審議会に6名の方から傍聴したい旨の申し出があります。

これをお認めしますのでご了承願います。

それでは、傍聴人に入ってください。

(傍聴人 入室)

**事務局** 本日の会議は、委員皆様ご出席いただいております。松戸市図書館整備計画審議会条例第7条により、委員の過半数が出席しておりますので会議成立となります。

---

◎会長挨拶

**事務局** それでは、常世田会長よりご挨拶を賜りたいと存じます。お願いいたします。

**会長** 皆さん、お忙しいところ、ご参集いただきまして、ありがとうございます。

今日は非常にいい天気、秋晴れでございますが、図書館界はなかなか秋晴れということにはならない状況でして、皆さんも御存じように、武雄市の図書館、あるいは海老名市の図書館の選書にまつわることについては、かなりネットでも非難が集中しているということがあります。表面的にいろいろちやほやされる図書館の実情はどうかというあたりは、きちんと精査して、行政としては責任をとっていく必要があるのではないか、その辺に手抜きがあったのではないかと思うわけであります。

松戸の図書館は粛々とやるべきことはやって、そういう齟齬が起きないように進めていっていただきたいと思うものでございます。

**事務局** ありがとうございます。

なお、教育長は公務のため会議途中で中座いたしますので、ここでご報告させていただきたいと存じます。どうかよろしくお願いいたします。

それでは、これより議事進行につきまして会長にお願いしたいと存じます。

常世田会長、よろしく申し上げます。

会長 議事に入ります前に、第3回の議事録の署名につきまして、大串副会長と森委員にお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

---

◎「人口40万人都市の図書館における比較について」

～柳澤委員におけるプレゼンテーション～

会長 それでは、議事の1、「人口40万人都市の図書館における比較について」ということで、人口において同規模自治体はどういう状況にあるかということで柳澤委員よりお願いします。

柳澤委員 今日は、人口40万人以上都市の事例調査をいたしましたので、大体人口40万人の街にどのような規模の図書館があるかということと、どういう立地条件になっているか、延べ床面積と比較して蔵書数について自治体によって様々だということを知っていただきたい。そして、それが図書館の指標として、1年間の貸し出し数、1人当たりの貸し出し数が、人口が多くなればなるほど少なくなるというのは当然のことですが、大体それがどのぐらい借りられているのかということを中心に、一つ一つ検証したいと思います。

最後に資料に事例データというのが載っておりますので、こちらを一緒に見ていただければと思います。27事例、柏市に始まって、船橋市まであります。船橋市は人口61万6,000人ということで、40万人から60万人ぐらいの人口規模の図書館における市立中央図書館を集めた事例ということになります。

結論から先に言ってしまうと、資料のとおり、27市の平均をとると、人口が47万6,000人になりますが、駅から距離にすると大体平均10.5分ぐらいの距離にあるものが、ここでいう平均ということになっています。それから図書館の延べ床が5,700平米ぐらいです。ただ、8番の豊田市、11番の長崎市の図書館が、非常に大きいです。駅前に直結したオフィスビルの中に入っている豊田市の図書館と、非常に規模が大きい長崎市が1万2,500平米と1万1,600平米と引き上げています。ただ、左下の19番の我が松戸市は1,932平米ということで10倍近く違うので、やはり大きな違いがある。

蔵書冊数においては51万1,000冊というのが平均値です。また、開架冊数が大事なことだと思っておりますが、これが平均27万7,000冊です。先ほど言いました豊田市は48万冊ある一方で、松戸市は12万冊と開きがある。その中の平均が27万7,000冊ということです。

図書館をやられている方が、結構気にされているのは、1人当たりの年間の貸し出し数ですが私が今、事務所を構えている横浜市は380万人都市で3.1冊と、当然人口が多いとそうい

う状況になります。小さな村に行けば行くほど、当然10冊と12冊と単位値も大きくなりますが、今回その貸し出し数は5.4冊というのが平均になっています。

今日は、こういった要件を少し建物の配置というものを見ながら、一つ一つ検証させていただければと思っています。

まず、柏市をご覧ください。私よりもご存じの方のほうが多いかもしれませんが、図書館の建っている位置は、駅から徒歩約10分ぐらいです。松戸市も距離で言えば同じような距離のところですが、市役所など行政的な施設を緑に、小学校、教育施設をオレンジに塗ってまして、柏は基本的には市街地の中に図書館がある。この蔵書数が29万6,000冊、開架図書割合が41.2%なので実際には収蔵しているものが6割ということになるわけです。実際にある全体の蔵書の中で40%しか、触れられていないということがわかります。

次が、人口40万4,000人の宮崎市立図書館で、ここは公園の中にある施設ですけれども、これは駅からバスに乗って結構遠く20分ぐらいかかる場所にあります。ただ、非常に立地が良く、周りは住宅ですが、公園の中の施設ですから、非常に大きな敷地の中にあります。周辺の環境は非常に恵まれています。これを見ていただくとわかるのですが、ここでは1人当たりの貸し出し数が、2.3冊。これは立地の問題なのか、蔵書数の問題なのかということが考えられています。この辺は皆様方からまたご指摘をいただければと思っています。

ここにも書いてありますが、蔵書が42万1,000冊ということなので、平均からすると蔵書というのはそんなようなものですが、開架が54%ということです。この開架率というのが1つのポイントになってくると思っています。

もちろん、本がどんどん増えてしまって、古い図書は蔵書に回ってしまうということがあるのですが、その辺のことを今日は注意して見ていければと思います。

いずれも、今お話ししたのは、最初の柏市は1975年、松戸市は1974年につくられていますから、今から40年前の建物ですので、そういう意味では先ほど言ったように、どんどん蔵書が増えて、開架が少なくなっているといったことが明確に汲みとれると思います。

次が、人口が40万9,000人の枚方市ですが、これは比較的新しく、2005年に建てられていますので、蔵書が59万3,000冊あります。大体、今の27館の平均値の蔵書数を持っているのですが、74%の開架率ということで、まだ10年ですから、逆に言うとそんなに蔵書はないのかなと思っています。枚方市は、駅から20分歩くような状況ですが、それにも関わらず貸し出し数が、9.1冊借りられている。この辺は図書館の分量というか、ソフトの問題もあるかと思いますが、そういう数字も伺えるということです。

それから岐阜メディアコスモスは本当に最近できたばかりで、いろいろな評判があり、私が以前勤めていた事務所の所長で、伊東豊雄という建築家がつくったものです。これも延べ床が9,400平米ありまして、蔵書が35万8,000冊、それほど大きな蔵書数ではありませんが、開架が70%弱です。これは駅から離れており、25分ぐらい歩きます。この施設は詳しく知っているのですが、今度、市役所が図書館の横に移ってくるので、非常に大きな敷地を確保してあります。この市役所が非常にいい建築なのですが、古くなって小さくなってしまったため、ここに移動するということが、図書館と市役所をこれから抱き合わせて計画している。最近では非常にそういう事例が多いです。小諸市も図書館と市役所、病院なども一緒に併設してつくっています。いわゆるコンパクトシティという考え方に基づいて、なるべく行政、官庁、それから文化施設をまとめていこうという1つの指針のあらわれなのかと思いますが、駅からは相当遠いということがあります。

続いて、藤沢市はこの30年で人口が30万人から42万人になり、今、関東圏では人口が増えて珍しい市です。特に大型ショッピングモールや、パナソニックが大きなパナホームを使った住宅設計し、住民を増やしているといったこともあります。その中で、藤沢市総合図書館というのは湘南台駅からは10分弱です。湘南台駅付近が新興住宅地で、90年以降、非常に大きな住宅開発がなされています。この面積は4,700平米と、大きくはないのですが、建物が延べ床で4,700平米ですから、特別大きいというわけではないです。ある意味、25万冊から30万冊の蔵書を開架に持っている街が、大体アベレージでしているような数字が4,700から5,000平米ぐらいだと思うのですが、その中で開架が89%ということです。これは建築されて30年ぐらい経つのですが、非常にコンパクトに建てられた建築で、岡田新一さんという方が設計された非常におおらかな建築です。そういうことも関係していると思うのですが、ここでの貸し出し率も非常に高く、駅から近く住宅地の中に建っているのです。

この辺が非常にユニークな考えができる。単純に駅からの距離だけがその開架率をはかるものではないということです。

次に、富山市立図書館は駅から徒歩1分のできたばかりの図書館です。人口で言えば42万人の人口ですから、そこに対して4,500平米あり、この規模ではジャストアベレージの延べ床の面積かと思っはいます。蔵書冊数で言うと45万冊、そのうち開架が14万冊なので、開架率としては新しい図書館ですが、意外と低い。まだ本が入っていないのかなというぐらいですが、これから本を逆にためていくのかと考えられます。ほかと違うのは、枚方市は7階建てですが、これは10階建てです。建て込んだオフィスもあるので、非常に高層になってい

て地上13階建ての中の10階部分が図書館になっているということです。

それから横須賀市は横須賀中央駅から10分くらい歩いたところにあります。これも1983年なので、藤沢市と同じぐらいの30年以上前です。結構古い図書館ですが、54万4,000冊という蔵書数がある中で開架が22万冊、開架40%ということで、30年前の図書館は同じような規模になっています。当然、蔵書が増えているということです。立地を見ていただくとわかるのですが、住宅地の中にある。一概に駅の近くにあるということではなくて、今のコンパクトシティという考え方がなかった30年、40年前は、博物館もそうですが、比較的住宅地の中や森の中、公園と一体化するということが考えられていた時代です。ですから、こういう配置も全然不思議ではないと考えています。

それから豊田市ですが、先ほど言いましたように駅前に直結している非常に巨大な施設ですが、蔵書が114万冊あります。開架は42%。豊田市は114万冊蔵書があるので、借りられているのは1人あたり8.7冊。これは駅と直結しているビルの3階から7階までが全部図書館という、非常に巨大な施設です。

次が、町田市立中央図書館です。人口42万6,000人で、駅から2分ということで、非常に行きやすい場所です。美術館が少し離れたところにありますが、図書館は駅に直結しているところにあります。蔵書は54万冊あって、開架率53%、つくられたのは1990年なので、25年前ですから、そう考えると大体このぐらいなのかなという感じもしています。ただ、町田は図書館のソフト、図書館の中の運動がかなり活発で、貸し出し率も9.9冊というのがずっと続いている数字なのですが、非常に貸し出し率が高いです。図書館に対する意識がすごく高くあります。

次は高松市ですが、これも駅から3分です。蔵書が57万7,000冊です。延べ床が結構大きなもので、8,700平米と普通の図書館より2倍ぐらいあります。

後ほどまたご説明しますが、単館と複合館という形があるかと思います。これは表を比較するとわかりやすく、2000年以降、複合館が増えています。70年代、80年代は単館で成立しているものが、駅にだんだん近くなり、コンパクトにしていこうということで、文化施設と一緒にしようと、複合施設にだんだんなっているということがわかります。

この高松市も町田市の例もそうですが、複合施設で、90年代前半の建築ですから、複合館のはしりみたいなどころではあります。

それから長崎市の中央図書館は、見え方としてはショッピングモールみたいな巨大な施設になっていまして、今から8年前と比較的新しいです。単館で大きい。4階建てといっても、

五、六階あるようなボリュームでして、これは先ほども言いましたとおり、延べ床1万1,000平米あります。とにかく床が多いということです。当然、そうすると蔵書数は57万9,000冊となっておりますが、開架率は高く64.1%です。

それから金沢は幾つか図書館があるのですが、金沢市立玉川図書館という1979年に建てられた古いほうの図書館です。これは延べ床が6,300平米で、蔵書は59万冊ですから結構大きいです。開架書籍が16.9%ですが、それでも貸し出しが6.0冊ということで、アベレージ5.4ですから、それでも結構借りられています。これも徒歩で言うと余り便利なところではなく、15分ぐらい歩く場所にあります。

今までの説明でちょうど半分ぐらいですけど、ここら辺で常世田会長や皆さんのご質問やご意見等をいただければと思います。

**大串副会長** この1人当たりの貸し出し冊数というのは、住民1人当たりの市の貸し出し数ですね。

**柳澤委員** そうです。

**大串副会長** これは地区館がしっかりしている町田などで多いのですか。

**柳澤委員** そういうことです。

**大串副会長** 柏が中央館より小さいけれども、貸し出しはほとんど変わらない。ほとんど松戸と同じ。

**柳澤委員** はい。住民1人当たりの貸し出し数が指標になるのかどうかということも、逆に議論の土壌等はあると思いますけど、今まで、よくそういう話をここの中でもされていたので。

**大串副会長** 町田市は、商店街振興組合が、図書館は集客能力がすごくあるから、それを商店街の振興に生かしたいということで、商店街側から入れてくれという話があって、大分検討したけれども、土地がなくて、それで近くホテルの中に入れたのです。町田市は地区館が比較的しっかりしている。規模も比較的大きくてしっかりしていて住民も積極的に参加しているようです。

**会長** そうですね。ここに出ているのは中央館ですが住民1人当たりの貸し出し冊数が高いところは、今副会長がおっしゃったように、地区館とか、それ以外の地区館の分館があって、自治体全体で本を借りやすくなっています。

だから、例えば低いところで言うと、高松市は、中央図書館は大きいですけど、それ以外に図書館は余りないのです。だから中央図書館の周りに住んでいる人は借りやすいけど、それ以外の市民は借りづらいという状況です。



町田市もそうですけど、藤沢市とか枚方市も分館や地区館が充実しているので、トータルで、貸し出しの冊数が増えている。金沢は小さい分館はないですけども、大きい地区館があと3つぐらいあるのです。このような状況としては数字が高くなりやすい。

それから、図書館は大きいけど、駐車場が余り大きくないと、集客量が低くなってしまう。

**大串副会長** 岐阜市の隣の小さな街が、村民1人当たり37冊とか40冊とか記録したことがあった。岐阜市民が多く利用していました。これはどうしてかと言うと、町役場があって、その隣に歴史資料館をつくった。ところが資料が余り集まらないので、1階は図書館にしたいというわけで、5万冊の図書館をつくったのです。町役場の前に広場があって、そこで朝市をやり、そこに隣の岐阜市民が大勢来て、ついでに図書館に立ち寄って本を借りて帰っていく。それを見た岐阜大の留学生がボランティアを是非やりたいというので、岐阜大の外国人学生たちがボランティアをやっていました。職員は2人しかいないが猛烈な貸し出しがあって、それでさすがに町役場も、そんなに図書館にたくさん人が来るのであれば、もっと大きくしようというので後に10万冊に拡張しました。

豊田市は規模が大きく、視察に行ったのですが、当時はまだ町村合併の前だったので、周辺市町村の一部事務組合で図書館を運営していました。それから豊田市図書館の中で置き場所がないというので、清掃工場の中に本棚をつくって、本を収納していました。それを今度、新館にしたときに、周辺市町村の一部事務組合が多分合併したからなおさら大きくなったのでしょう。

**柳澤委員** この岐阜メディアコスモスという新しくできた図書館は、木造でできているというのが、実は非常に特徴的です。

皆さん、図書館というのはRC、鉄筋コンクリート造という認識でおられるかと思いますが、昨今、公共建築ですから、木造を推進し、地場産の木造を使ってくださいということがあって、これは木鉄骨鉄筋コンクリート造と3つハイブリッドされていますが、メインの空間自体は木造の天井、木造の屋根で囲われている。非常に柔らかい空間なのです。今、大学図書館でも木造で、秋田の教養大学とか、非常に美しい大学が増えていると思うのですが、そういったことも随分これから変わっていくだろう。非常に今、人気になりつつある。ちょっと構造的なことで、建築的なイメージの問題も含んでいるのですが、そういったことも変わりつつあるということを見ていただければと思います。

**大串副会長** 長崎市は多目的室というのを用意しています。

**柳澤委員** そうですね。

**大串副会長** あそこは県庁と市役所の間に挟まれているところにあって、最初は、いろいろな団体が図書館でチラシを置くとさばけるというので置く団体が増えた。それから、図書館と一緒にやると非常に人が集まるということになった。経済団体とか、そういう団体が図書館の多目的室で連続講座とか、職員の研修をやりたいと申し出てきて、実際図書館でやると、人がなおさら集まるということになったようです。

**柳澤委員** よく図書館は、駅と市役所とか官庁施設といったものを三角形でつくるというように、日本はすごく三角にこだわりがちです。3点を結べば安心するのか。2点だと安心できないのか。長崎もわかりやすい事例ですが、大型ショッピングモールと市役所、消防署、それから駅を結んだ3点の中に図書館を入れるということで、回遊性をつくろうという明確な指標でつくられている。コンパクトシティという概念の中で、図書館がそれこそ街の回遊をつくるということを明確に2005年ごろから言い始めています。

**大串副会長** だからここは県庁だと思う。

**柳澤委員** そうですね。県庁と市役所つないで。

**大串副会長** もとは学校だったようです。原爆を投下されたときに、ここは救護所だった。そういう跡も残している。

**柳澤委員** 平面で見ると、本当は高低差がわからないので、申しわけないですけど、実際には地上の高低差があって、ここは川もあり、その川が近いイメージです。

**大串副会長** 複合ビルもあって、複合ビルはたしか50カ所か60カ所あります。

**澤谷委員** 開架書籍の率のところが松戸市は低いとずっと思っていたのですが、これを見たら意外と高いということで驚きました。開架書籍の書架の割合は高い、低いという、その良し悪しというのがどう見たらいいのかよくわからないと思いました。

もう1つ、大きな図書館であっても、開架書籍の割合が低いというところもありますけど、その割合が低くなる原因というのは、その図書館の中の内部の使い方によるものなのか、もしその辺がおわかりであれば教えていただきたいと思います。

**会長** 建築家としての意見は柳澤委員からいただくとして、図書館員から言わせていただくと、まず開架率よりは絶対数のほうが問題です。つまり、松戸の開架率は悪くないですけど、絶対数が小さいので、幾ら開架率が多くても大した数ではないのです。

これまでもお話したように、森羅万象、全体を本という形で集めるわけですから、1つの分野に限ると100冊ぐらいになってしまうのです。だから絶対数がある程度ないと十分な情報提供ができないのです。

現状、今の日本人が専門的な情報が欲しいと思った場合、30万冊くらいないと足りません。20万冊ではとてもじゃないですけど、一定のテーマについて絞り込んでいくと、ほんの50冊とか100冊程度になってしまう。棚で言うと1棚か2棚になってしまうのです。それではとてもじゃないですけど対応できない。それを踏まえてこの開架冊数のところを見ていただくといいのではないかと思います。

それから、なぜ閉架と開架の違いが出てくるかと言うと、小さい図書館でたくさん本を持つと思うと、狭いところに押し込まなくてははいけませんから、そうすると利用者が歩くところではそんなに密度を上げるのは無理なので、倉庫にし、空間がほとんどないようにしている。圧縮して本をたくさんそこにしまえば、小さな図書館でもたくさん持てますので、昔はそういうことをしてしまったわけです。

ところが、しまってしまうと、ほとんど触らない。利用率は10分の1から、20分の1に落ちます。それで今はなるべく外に出そうということになるわけです。そうするとある程度、本棚と本棚の間は空けなくてははいけませんし、本棚の高さも8段、9段なんていうと息苦しくなってきましたから、低くしないとはいけません。そうすると単位面積当たりにある本の冊数が減りますから、面積がそれだけ必要になるのです。

そのバランスがなかなか難しいですけど、幸いなことに、日本の図書館建築はだんだん大規模化してきていますので、ある程度の冊数をオープンにしても何とか持てるような状況にはなってきています。

**澤谷委員** ありがとうございます。

**柳澤委員** 数字は裏切らず、現実的であるわけですが、開架の40万都市の平均が27万7,000冊ということで、残念ながら松戸市は最低の12万冊です。つまり、ほとんど開架にしないと、40万人市民に対して対応できないわけです。蔵書が50%になると、市民に対するサービスの質というのが低いわけですから、処分してしまった本が多いのではないかと、不安が出てくるのかなと思うのです。

**会長** 閉まってしまうと利用されないとお話ししましたが、さりとて、持っていれば、リクエストがあったときに、倉庫から出して提供できるわけです。そこでほかの自治体を見ていただくと、40万冊、50万冊という本を、倉庫の中とはいえ持っているわけです。ところが松戸は全体で見ても15万冊しかないのです。だから提供しようとしても出しようがない。

**澤谷委員** そうするとそこに松戸としての大きな課題がある。

**会長** はい。資料の奥行きがない、種類がないということです。

分館の数が多いため、松戸の場合は、分館でそこそこの本は持っていますけど、当然のことながら、似たような本が多く、分館には専門的な本がない。入門的な、易しい本はたくさんあるけれども、何かについて専門的に研究しようと思うと、その奥行きがない、本来ならば大型の中央館に専門書群の蓄積があって、知識の奥行きを支えなければならないが、その中央館がない。それが松戸のコレクションの状況だと思うのです。

**鈴木委員** 今、松戸市の現状はこのとおりで、先ほど常世田会長から30万冊というお話がございましたけれども、今後、松戸市は30万冊を目指せば十分なのか。面積についても、48万都市に見合う中央館の面積は、大体どのくらい必要かお話をいただければと思います。

**会長** あと残りの半分のお話をいただいてからにしましょう。

柳沢委員続きをお願いします。

**柳澤委員** 13番の尼崎市立中央図書館です。これも駅から徒歩5分、非常に便利なところにあります。これは単館です。1990年なのでもう25年前それなりに時間が経っているのですが、ちょうど4,700平米ぐらいで、蔵書は43万冊です。開架が55%、尼崎は駅から近いのですが、3冊しか借りられていないという不思議な状況があります。その中でも開架書架としては24万冊。今まで見てきた開架の事例もいろいろだと思います。

今、鈴木委員がおっしゃったように、先ほど常世田会長がおっしゃったのは、開架30万冊というのが1つの指標になるだろうということです。そういうことを頭に入れながら見ていくと、豊田の開架は、48万冊という数字なので、これは私もまだ体感していませんが、尼崎市では24万冊という形で、標準的な数字になっている状況です。また地上3階建て、地下1階建てで、大体地下に閉架書庫があるというパターンなのですが、このぐらいの規模が、言ってみれば標準的な大きさになっています。

次は、身近なところですけど、市川市です。これも皆さんご存じだと思いますが、駅から15分ぐらいです。これは複合館で、20年前ぐらいになりますけれども、延べ床も6,400平米ありまして、蔵書は68万冊、蔵書が多い館です。これもショッピングモールにくっついているという1つの商業施設とともにあるあり方で、最近の事例では出てきている。私はショッピングモールの研究もやっておるのですが、先ほどの長崎も同様、ショッピングモールみたいなのが巨大化しており、2000年以降、都市の中にどんどん入ってくることで、巨大な駐車場と大きさを完備していますので、その駐車場を利用して、図書館が使うということも行われています。1人当たりの貸し出し数が6.2冊ということです。ここは34万冊開架ですから、30万冊を超えるというのは、大体このぐらいだということを感じるので、ちょうどいいと思

います。

続いて、福山市です。福山市は住宅地の中にある駅から、10分ぐらいの複合館です。建築は7年ぐらい前と比較的最近ですが、延べ床が4,800平米で、蔵書が43万3,000冊、その中で開架が32万冊と74.9%の開架率ですから密度が高いということになります。この辺はあとで常世田会長にもお聞きしたいところですが、館の規模と蔵書数は、当然、書架の密度感というのが大事ですけれども、今の松戸の図書館をご覧になっておわかりのように、すごい密度ですよね。特に児童書架は本が溢れかえっていて、あぁいった状況にならざるを得ないということです。面積が小さければ、当然書架をたくさん積まなければいけない。ですからその辺のバランスも当然あると思います。比較的詰め込んでいらっしゃる。

次に大分市民図書館ですが、この辺にくると、47万人を超えた人口規模になります。そのため横並びになってくるのですが、54万冊、開架が97.6%。延べ床4,500平米です。大分は貸出数1.8冊という、かなり貸し出し率としては低いですが、駅から2分なのです。この辺は状況がまだ読み取れません。

次、西宮市です。48万人都市です。駅から徒歩6分の地上3階建て単独館です。これは1985年建築で30年前に建てられたのですが、敷地が4,000平米、延べ床が4,600平米というのは、極端なことを言うと、そのまま建てればほぼいっぱい建っているということです。実際は3階建てなので、3分の2が建物になっていますが敷地にそれほど余裕はないという建て方です。

ちなみに、先程の大分市は、1万8,000平米あり。駐車場をゆったりとっているということも関係している。もう1つは再開発という、開発の1つのあり方なので、その用地をこれからまた別な施設をつくろうということでもっているということもあります。

この西宮はきっちり建っているのですが、開架が34万7,000冊ということで、89.2%の開架率がありますので、非常にゆったりとした、いい施設です。

続いて、倉敷市です。倉敷市は駅から15分ぐらい歩いたところにあります。これも1983年、西宮市と同じく30年以上前の建物になりまして、この当時のRCの3階建て、ないしは4階建てというのはもうお決まりのパターンになっています。その中で、倉敷はそれでも蔵書51万冊持っています。30年前ですから、開架が42%、先ほど同じ30年前でも西宮市は開架89.2%と頑張っていると言えると思います。余りため過ぎず、開架に重きを置いているということです。

30年経つと大体40%ぐらいになってくるということが自然とお分かりかと思いますが、

この辺がもう1つの議論になるかと思います。今や、閉架書架を持たないという図書館も出てきているので、そういう意味での閉架書架のあり方というのをどう考えるかということになります。

続きまして、一番大事なところ、松戸市です。松戸も1975年建築でもう40年以上前ですから、このころにはコンパクトシティという概念はまだ育っていない時期ですので、図書館、博物館、美術館というものを駅から離して、逆に外で回遊をつくりましょうということが都市計画上の1つの指針としてありました。ですから、公園の中とか、森の中とか、そういったところに図書館があることが多かったと思います。

今は逆で、駅の近くにそれぞれショッピングモールであったり、そういったものと共有しながら使うということに変わりつつあります。その当時で言うと、配置図を見ていただくとわかりますが、駅から真っすぐ行って何も敷地に建てるということは、普通のことであったのです。

今は駅と、それからショッピングモールや、行政の施設で三角をつくって、その間に図書館を置いていくというような関係に少しずつなっている。もしくは、例えば商店街につながった先に図書館があつて、図書館と駅をつなぐ商店街があるというような事例は結構見られていると思います。

松戸市の事例を見ますと、松戸市は48万6,000人。皆さんもご存じでしょうが、RCのその当時は最先端な5階建てです。敷地面積が非常にコンパクトになっていて、それに対して延べ床が1,932平米は、非常に稠密に建っているということで、見てわかるとおり、余裕が全くないということも言えます。

その当時の敷地の状況や、土地の価格、当然いろいろな問題があったのでしょう。蔵書が15万6,000冊で柏は29万6,000冊ですから、蔵書で言うと、柏の半分ぐらいになっています。開架が12万冊でおわかりのとおり、平均が27.7万冊ですから、半分以下という蔵書数ですので、開架率の高さということも大事にはなってきますが、先ほど常世田会長がおっしゃった絶対数が足りていないということになると思います。

続いて、東大阪市立図書館ですが、1992年建築なので20年くらい経っています。RCの3階建てで、敷地が2,700平米あり、3分の2ぐらい使っている。32万の蔵書数で、開架が53.8%。これも駅からは離れていて、15分ぐらいかかりますので、若干不便なところにあります。これを見てわかるとおり、百貨店と駅をつなぐ間にあるということで、ひとつ図書館を、百貨店行ったら寄れるということは条件としてはあるかと思います。

続いて、宇都宮市立中央図書館。この辺から50万人超える都市になりますが、ここは駅から歩いて10分です。単独館ですが、これも30年以上前の前の建物で、駅から少し離れたところに公園と一体化してある。ここは絵を見れば、非常に環境がいいことは一目でわかると思います。公園の駐車場を使って、文化センターと一緒に使っている。30年前の模範例です。延べ床は4,700平米と、やはりそれほど強固に詰め込んでいるわけではなくて、蔵書も52万冊あり、開架率は38%、借出数は8.6冊と非常に高い。駐車場の多さというのも、昨今ではすごく大切なものになっていて、子育て中の方や、お年寄りなど本が重く車でないと持って帰れないということもあり、僕自身実際に見てきた図書館の中では、駐車場と貸し出し数というのは意外と関係しているように感じています。

続いて、松山市です。松山市も51万7,000人都市で、駅から6分の複合館です。87年に建てられ、敷地が大きいです。これも文化施設と一緒に使っていて、行政と一緒に使っている。延べ床が5,600平米で、蔵書が41万7,000冊、開架率が49.9%です。30年近く前になりますが、ちょっと駅から離して、いろいろなものと一緒にするという、文化施設と一緒にするというひとつの当時の典型パターンです。

それから、姫路市です。姫路市は54万人都市ですから、ちょっと駅から遠いです。バスとかで行くような場所です。これは姫路城の脇にあって、これは25年前ですけど、これも駅から離して文化施設と博物館や、公園施設と一緒に使っていくというタイプです。恐らくこの当時はいろいろな図書館を皆さん見て、地方自治体の方たちが行って計画していると思います。その当時、公園など、風光明媚なところにつくられている範例的なものだと思います。特に50万都市ですので、そういったことが重要です。もう1つは観光と重ねるというのも、今は出てきていると思いますけれども、延べ床は2,800平米と50万都市にしては非常に小さいです。蔵書がその分、51万冊と結構ありますからきつきつに詰めているということが想像できる。開架率が40%ですから高い書架があるか、地下に多く持っているか、お城のふもとなので、高さということに制限が当然あると思いますが、そういうことも関係していると思います。

続いて、八王子市です。これが1984年の30年前にできています。申し訳ないのですが、図面が違います。数字は合っていますので、数字を見てください。蔵書が多く、91万6,000冊あって、開架率が非常に低い。できたのは30年前なので開架はこのぐらいということ。そのうち開架の冊数としては、26万9,000冊。全体のほぼ平均になっています。

続いて、川口市です。58万人の都市ですが、駅前に直結してしまっていて、これも高層で8階建てのオフィスみたいなところにあるのです。再開発の一環としてオフィスビルとか、上の

階に同じようにコミュニティセンターと一緒にしている。これが延べ床6,940平米、蔵書は51万5,000冊、開架率は61%です。完全に駅の直結で、ペDESTリアンからそのまま渡ればあるというビルで、非常に利用しやすい感じであります。ここの開架が31万冊ですから、非常に整然と図書館ができていているというイメージです。オフィスビルの一画なので、図書館というよりはオフィスビルの中にある。豊田市もそうですけど、外から見れば図書館らしさというのは全然微塵もない。そのらしさの定義は何かというのはあります。

次に鹿児島市ですが、ここから60万人を超えてきます。鹿児島は延べ床5,000平米に対して55.7万冊ですので、非常に密度が高い。駅からも非常に近いです。これだけ駅から近くて文化施設も近ければ、もっと借りられてもいいのではないかという感じもありますが、その辺の理由がまだわからない。駅の横にある紫色はショッピングモールです。

全体で27図書館、今日ご紹介し当然、いろいろな指標があるかとは思いますが、数字で見るということは非常に大事なことであります。ただ数字ではどうしても見えないような配置、ほかとの因果関係、駐車場や、それから周辺の環境という、全部を映し出したものがこれです。今回のためにこの資料をつくったのですが、半数以上は住宅地の中ということもありまして、あとは駅からの距離や、ショッピングモールなどの商業施設、行政との関係の中で配置しているということが1つの指針になっていると思います。

今日は全体の規模ということで見たんですが、最後に別の視点で見た資料です。少し図書館の研究をしております、これは日本図書館協会から日本図書館協会賞という賞をもらった建築だけを取り上げていまして、1985年から2014年まで56館あるのですが、その中で開架スペースにおける閲覧スペースの割合というのが1985年から非常に明確に変わってきている。松戸の図書館ができた40年前はまだですけど、大体30年前から明らかに閲覧スペースが重要になってきている。今まではどちらかと言うと数字で見た中で、書籍とか冊数だけですが、これは空間の話でして、今は閲覧スペースが30%以上超えるものが非常に多い。逆に80年から89年まではほとんど10%台で、いかに本を重視したか。読むスペースではなくて、本を置くということから、今は本を読むというスペースが重要になってきているということも、この表では明確に言えるということで、つけ加えさせていただきます。

以上です。終わります。

**会長** 最後の閲覧スペースというのは、座って本を読むというだけではなくて、人と人が交流するという図書館のいろいろな機能を果たすための空間が少しずつ増えていったと感じていただければいいと思います。



ちなみに、図書館協会の建築賞の第1回目の受賞が浦安市でした。

**柳澤委員** 常世田会長が館長だったときですか。そのときはまだ閲覧スペースが余りない。

**会長** これは私が館長になる前です。その後、増築をして、閲覧スペースを増やしました。

先ほど鈴木委員の質問についていきなり具体的な面積というのは難しいですけど、この表を皆さん見ていただいて、どう感じるかということです。

ばらつきはありますが、少なくとも松戸の場合は敷地面積が異常に小さくて、1桁違います。敷地面積、要するに建て坪が小さい。面積は柏と近いですが、柏の場合は敷地面積が2,234平米ありますから、4倍ぐらいあるわけです。また柏は2階建てですが、松戸の場合は上に高いので、1つのフロアの広さが松戸の場合は狭い5階建になっている。延べ床と言うと、岐阜とか長崎あたり別格ではありますが。

前回お話ししましたように、この審議会の次の役割が、計画作成の際皆さんに議論していただいた基本的な機能について、より具体的に何をやるのか、どうすればいいのかということ積み上げていくことになります。ここで何回も議論が出ましたけれども、閲覧スペースは柳澤委員から話がありましたけど、ただ本棚だけがあるという図書館から、本棚以外の空間が少しずつ増えてきているというのが、この最後の棒グラフのところですよ。何が増えていくかと言うと、飲食のできるカフェテリア、ギャラリー、集会室、視聴覚室、ボランティア室、それから市民の交流できるスペースなど。規模が大きいものになってきていますので、自由スペースと言うと言い過ぎですけど、本を貸したり本を読んでもらうだけではない、図書館が持っている多様な機能です。これは文部科学省も「望ましい基準」ですとか、「これからの図書館像」などで繰り返し言っていますけれども、地域の課題を解決するという、ここに働き盛りの人もどんどん来て、まちづくりをどうするか、商店街をどうするかとか、新しい産業を興すにはどうするかとか、あるいはNPOを使って、地域をもっと活性化させたいとか、そういういろいろな課題を抱えて図書館を来たときに、ただ本を読んで、それについてのヒントを手に入れるというだけでは、なかなか目的を達成することができない。そこでいろいろな市民が会って、俺たちの団体はもうそんなこと解決しているよとか、あんたがこういうことをやりたいんだったら、うちのほうもこういう手を貸せるよとか、そういう自由な市民の交流が生まれて、新しい活動がそこで生まれていく。そういうような図書館を目指すべきです。これは実際には、先進的な図書館ではそういう活動が少しずつ生まれているわけです。ビジネス支援だとか、医療情報の提供だとか、法律情報の提供だとか、そういうものも含めて、市民同士での交流も生まれていく。

そういう話をすると、それは公民館がやるのではないかとかいうお話が出てきます。実は公民館はそれを目指していたのですが、それをうまくやっている公民館はほとんどないのです。ほとんど部屋貸しになってサークルが活動するときだけ、部屋に入って、閉じこもって活動して、終わったらすぐ帰ってしまうわけですから、そこで活動している同士のサークルが横断的に交流をして、さらにより高い活発な活動を広げていくなんていうのは、なかなか実は実現できていない。逆に図書館が広げていくことによってそういう交流が生まれつつあるというのが今の大方の考え方です。

ですから、図書館はそれをもっと進めなさいとアメリカの図書館協会の会長も日本に来てそういう話をしましたけれども、そこがポイントになると思います。そうなるとその空間が今までの図書館にプラスしていかなくてはならない。そうすると市民が交流するための空間というものを考えなくてはいけないのではないかと。従来型の図書館機能を積み重ねていっても、ある程度の面積は出ますが、それに今お話したような空間をプラスしなくてはいけないのではないかとというのが最大のポイントだと思います。

**森委員** 柳沢委員、本日のデータありがとうございます。今の常世田会長のおっしゃったことにつなげてはすけれども、これを見て私が一番感じたのは、図書館自体の形態が、単館から複合施設へ移っているということでございます。それは以前、常世田会長がおっしゃったことを念頭に入れてだと思っております。

前回、柳澤委員もおっしゃいましたけれども、今後の公共建築物というものは、そんなに新しくはつくられない。だからつくるとしたら、本当に70年先を見据えてつくらなければならないということをおっしゃいました。今、松戸のまちづくり、再開発と同時進行、してやっているということを考えましたら、本当にそれが何よりも重点的に考えなければいけないことだと思っております。

私は、以前、公民館でお世話になっておりまして、公民館活動も多少は関わらせていただいているのですが、その中で、松戸の社会教育というのはとてもレベルが高くて、いろいろなことをしているなとは思っております。間もなく11月3日に、松戸市の文化祭があります。その中でまたいろいろな方たちが、いろいろなものを持ち寄って発表をなさるという場もあって、市民が元気でいいなとは思っているのですが、ここ十数年、私はその文化祭に通い詰めて、少し気になる点があります。

それはそのサークル自体が非常に先細り感を感じるのです。それは何かと言いますと、少子・高齢化によるものだと思うのです。お話を聞いてみますと、なかなか新しい方たちが入

ってこない。公民館で盆栽であるとか、お花であるとか、掛け軸であるとか、絵とか、いろいろな焼き物とかあるのですが、ここ四、五年、どんどんその作品が小さくなっています。要するに、メンバーの年齢が上がってしまって、大きなものをつくれな。重いものをつくれな。だから、いつまでこのサークルがもつのか、新しい方が入ってきてくればというお声も聞くことがあるのです。その中でどうしてもサークルのメンバーが年をとることで、メンバー自体が亡くなる。従来型の社会教育活動というのが、今後は新たに考えなければいけない。例えば今までみたいな場をそのまま借りてではなくて、新たに作る図書館であるとか、松戸市の開発における複合施設で新しい交流の場というものを提供できる。そういうことも考えなければいけないと思いました。

昔のバブル前の日本の公共建築物は、日本人が少なくなるということを考えないままつくった建物がほとんどなのではないかと思うのです。それは日本人の意識の中に、個人を考えるのではなくて、日本の家族、家は永遠に続く、なくならなだろうという漠然とした意識があつて、それをもとに、例えば年金であるとか、いろいろなことを日本人全体として、政府も考えてきた結果だと思ふのですけれども、実際の現実問題として、家に後継ぎがいない。少子・高齢化でいろいろなサークルなども人が少なくなっている。そういうこと踏まえて、今後の図書館にそれを補完する機能というものをつくる。その補完する機能を担保するためにも、スペースは確保しなければいけないのではないかと思います。

**会長** 今、おっしゃっていただいたことは非常に重要な言葉になるかもしれないです。ノウハウとか、ものの考え方が不変だという前提で、社会教育や生涯学習をやってしまう傾向があるということです。だから高齢者が増えていくと、公民館で、民謡の会とか、将棋の会とか、そういうのをやるという、高齢者の趣味、高齢者の社会活動がそういうイメージになっている。

考えてみたら、僕らが高齢者になっていくと、ビートルズを聞いて育った人が高齢者になっていくわけです。それで民謡はないだろう。そういう意味で市民が文化的にどういう変化をしていくのか検討する必要がある。当然、ニーズや活動は変わっていくわけですから、その入れ物も変えなきゃいけないはずなのです。

だけど、そこがすごくアンバランスで、図書館とか公民館についてのイメージも従来型のイメージがなかなか抜け出せない。そこで市民も公務員も、年寄りはこのことをするであらうという古い前提で計画を立てている。

しかし、そこで活動する人たちの価値観も考え方ももちろん違ってくるわけです。そうす

ると、やっぱり、それに応じた入れ物を考える必要があるということだと思います。例えば私たち60代、50代を、実際調べてみると、結構スマホを使っていたり、パソコンを使っていたりする人もいるわけで、職場で否応なく使わされてきた人たちが、今、退職を始めているので、いつまでも年寄りにはパソコンに弱いだらうという前提で考えていたら、それはおかしいわけです。ものの考え方や活動の仕方が変わる人たちに対して、図書館や公民館をどうするという発想をすることが重要なポイントだと思います。

**森委員** 公民館の機能は大きく、2つあると思うんです。1つは貸し館機能、それからもう1つは公民館学習です。その中で公大連携であったり、いろいろ学ぶ場というのも随分あって、それがとてもレベルの高いものだなと思うのですが、いかんせん、少子・高齢化の社会の中では、サークル自体が楽しみであって、仲間づくりであって、そういうサークル自体というものは、本当に先細りすると思うのです。

公民館の、地域を活性化するとか、地域の課題を見つける、そういう学習の場というものが、今後、図書館とも連携もできるであろうし、今後も、次にどんどんつながっていくものだと思いますが、ただ、公民館の1つの機能というのは、今後、先細っていくのではないかなと思っています。

**澤谷委員** 今、森委員のおっしゃっていることを、ひしひしと感じる部分があります。

学校教育の子どもたちの現状を見ながら考えますと、先ほど常世田会長がおっしゃったように、自由な市民の交流を目指すべきではないかというときに、森委員がおっしゃったように、いろいろな世代が集まれる、そこに興味を持って来られるようなスペースというのを提供する必要があるという気がしました。

先細りとおっしゃいましたが、高齢化ではありますけれども、高齢者と若い世代と一緒に接する場というのが、今、松戸の中にどれだけあるかと言うと、ほとんどないのではないかと思います。それはなぜかと言うと、それが提供されていないだけであって、例えば子どもたちの場合は、放課後とか、休みの日とか、運動系は施設開放ということで、ソフトボールをやったり、バスケットボールをやったり、そういうところで集まることができますが、文化的なもので集まるということはどこにも保障されていない。場所もないのです。そうすると、若い世代と接する場が図書館でつくられた場合に、そこに高齢者と若い世代が接する場、ともに何かを学んだりとか、教えていただいたりとかいうことができるのではないかと。それは先ほどおっしゃったように、公民館のいろいろやっていることの先細りとおっしゃるものを解決する方法の1つにもなるのではないかと。また、子どもたちにとってもとても大事なこ

とではないかなと思いました。

**会長** スポーツ系にしても、文化系にしても、従来型のイメージが強い。スポーツ系は、ちょっと怖いおじさんが、地域の、クラブ組織の野球やサッカーを指導するイメージです。文化系で言うと、私たちが思い描くのが、絵を描くとか、音楽とか書道とかです。若い人たちと高齢者が一緒に活動できたとしても、イメージとしては、そんな従来型の感じだと思います。

そういうところで子どもたちや大人がそこで交流するというのは両方あっていいのですが、僕はもうちょっと違う第三の活動があるような気がします。うまく言えないですけど、例えばパソコンを使って、3Dプリンターで何か新しいものをつくっていくというスポーツでもないし、従来型の文化でもない活動。例えば今、スポーツサイクリングが流行っていますが、サイクルコンピューターというものがあります。略してサイコンといいます。自転車に据えつけてサイクリングをしていくと、その記録が全部そのコンピューターに記録されて、自分がどのくらいのスピードで、どのくらいの高低差を走ったか記録が残るようになっていきます。そんなふうにサイクリング自転車は技術革新があって、今進んでいるんですけど、そういうスポーツをやりながら、サイクルコンピューターを使って、数的にそれを分析していくような活動を両方やる、従来のスポーツだ、文化だと、簡単に割り切れないような、新しい活動です。そういうものがないと、本当に従来型の、根性型の地域スポーツと、それにはついていけないだらだらやるスポーツ、文化系は何か先生について、あるいはちょっとしたサークルみたいなどころで、そこそこの焼き物、そこそこの絵、そういうことしかない。

日本の企業戦士で、英語も使い、海外にも出て行ってばりばり頑張った人が、今リタイアして、地域にごろごろいるのに、もったいないと思います。つまり、日本の企業戦士が外国でどういう苦労をしたかみたいな話を、生き生きと子どもたちに語るみたいな、そういうサークルがあってもいいではないですか。日本人が持っているポテンシャルとか、地域とかスキルみたいなものを生かした新しい活動。それは単なる文化活動とも言えない、スポーツとも言えない、南米の奥地にボリビアに行って、日本の冷蔵庫を売るのにこういう苦労をしたんだよっていうことを話してもらえれば若い子どもたちは生き生きして聞くとおもうのです。何かそういうのが全部抑えられてしまっているような気がするのです。

**澤谷委員** 全くそのとおりだと思います。10代の子どもたちがそういうものに出会うところというのがないですね。多分、出会うところがあったら飛びついていくと思います。

あとはもう1つ、絵とか音楽とかおっしゃいましたが、今、子どもたちでそれをやっている子というのは、実は恵まれた子たちであって、ご家庭の格差というのがあるから、なかなか

か好きであっても、それに接することができない子というのが多いです。

今、常世田会長がおっしゃったように、例えば図書館という場でこんな話をする人がいます、こういう経験を伝える人がいますということをアピールするようなことができれば、すごく魅力的だと思います。

**会長** 繰り返しになりますが、例えば今、格差の問題が大きくなっています。学校に行っただけで、学費が払えなくて高校を中退してしまった子どもに、コンピューターにちょっと詳しい大人が、コンピューターを使いクラウドファンディングを利用して、その子に資金を集めて海外に留学するまで面倒を見ようとする。地域の若い人から高齢者まで年代を越えてその活動を支える。そういう活動が保障されるような空間。そういうわくわくするようなことが担保されるような空間を、今度の図書館で実現できないかということだと思います。

**森委員** しつこくなりますけれども、公民館にあるサークルが先細りになったのは、まさに常世田会長がおっしゃったような、物足りなさというのがあったと思います。公民館というのは、サークルであるとか、家庭教育のサークルが、その興味のワンステップになって、あと、やりたい人は自分で習いに行くというスタンスでもあるわけです。

実際に興味のある方というのは、自分でしっかりお金を出して極めたり、特に日本の芸事、書道にしても、「道」がつくものというのは修行になりますから、中途半端なもので物足りない方というのは、それなりにしっかりとその専門のところで学ばれるわけです。

だから、やはり同じ文化を伝えるにしても、私は常世田会長がおっしゃったような、もっと、1つの本なり情報を媒介としたやりとり、言葉も媒介としたやりとりというのは必要ではないかなと思います。

今度私たちがつくりろうとしている新しい図書館は、広場でいろいろな人が集まって、いろいろなことをつくり出す場というものなのですが、いろいろな方に誤解されているのは、ただ人が集まるだけのお祭りの場であって、松戸の社会教育の従来型のパターンのスライドだと誤解されている部分があるのではないかと思うのです。

ラーニングコモンズにしても、もっと言葉、本、情報を媒介とした深化できるものではないかと思いますがし、そこまでしないと人は飽き足らない。例えば国際交流で、「『ハロー』と言って、にこっと笑ったら、もう外国人とお友達になる、折り紙できたらお友達」というのは私ほうそだと思います。どれだけ自分が自分の考えを適切に伝えて、初めてお互いの考えが理解できると思うので、ラーニングコモンズという場でもっともっと交流が深まる場であってほしいと思うし、ある意味、余り安直だと文化が伝わらない。

子どもは正直ですから、澤谷委員が一番ご存じだと思いますけれども、中途半端だったり、嫌な先生だったら、子どもはすぐわかりますし、やはり本物でないと伝わらないと思う。本当のことを伝えて初めて文化って伝わると思うのです。それも大人から子ども、親から子というよりも、おじいちゃん、親、子と年齢の開きをもって初めて伝わるものであるのです、そういう場をつくれなかなと思うのです。

**会長** 副会長、どうですか。

**大串副会長** 今の日本の図書館というのを考えると、若い人が図書館に行っていないということがあると思うのです。例えば、ボストンの昭和女子大に行ったときも、地域の図書館を幾つか見て回りましたが、若い人が集まっていました。例えば文化祭にしても、若い人たちだけで文化祭をやっている。日本の場合は図書館にも行かない。図書館に行く経験を持っていないわけです。持っていないから、例えば大学図書館には40万冊とか50万冊あって、それが書庫まで全部入れるのですが、そこに行かない。「何で行かないの」と聞くと、「本がどう並んでいるかわからないと、そういったところで「行かない」と言う。

私の大学の場合は、所属学科で1学年100人ぐらいいるんですが、図書館では、NDCの分類というのをを使って、番号順に本が並んでいるということを高校までに聞いたことがある、少なくとも覚えている人はいるかと聞いたら、100人のうち4人しか手を挙げない。地元の図書館でもとにかくいいから、図書館に行くという経験を持つということを、若い人は必要だと思うのです。

例えばドイツ、図書館振興財団の補助金をもらって現地視察したレポートにあるのですが、8,000人ぐらいの小さな村は、その中学生が、自宅へかばんを置くと、まず図書館に行く。図書館に行って図書館員にいろいろ話を聞いて、宿題などをそこでやる。そこには宿題のためのボランティアがいて、それに宿題の話だけでなく、学校の話や、自分の悩みも含めていろいろなことを、そのボランティアに話ができるというような内容でした、確か。

日本の場合、図書館に若い人たちの部屋は必要だと思うんです。子どもたちは騒ぎますから、外に声が漏れないように子どもたちの部屋も必要で、お母さん方はそこで読み聞かせなどをやってもそれはいい。中学生、高校生はそこがたまり場になってもいいし、そこで宿題をやってもいいし、ボランティアがいて、話を聞いてもらってもいい。日本の場合は、音を出してはだめだということになっていますけど。アメリカの図書館の場合は、中庭で若い人がエレキギターとか弾いてもいいんだというような割り切りがあります。

ドイツの話ですと、図書館の講座の一番の人気は何かと言うと、日本の漫画のイラストを

描くこと。それで漫画を描くとなると、皆さんは漫画を描いた経験があるかどうかわかりませんが、技術が必要だし、それから道具も必要です。子どもたちが漫画を描いて、それなりに表現力をつけて、それでみんなの前で発表するためには、道具がないと本当にみんなに見てもらえるような図が描けないです。そういうのは日本でもやってもいいのではないかと思います。また、いい漫画を読むということはすごく大切だと思います。戦後、日本の貸本屋で一番よく借りられたのは、手塚治虫と長谷川町子です。僕が勤めていた図書館は、いいものは全集で集めて提供していました。

だからもっと若い人たちが集まるように仕掛ける。それから子どもたちに対して、図書館の空間というのは、本がある空間というのはこんな楽しみがあるということを感じられる図書館、そういった空間づくりと、そこで本を読むことの楽しみを知ってもらう。

毎日新聞の調査でも、小さいころ、大人に本を読んでもらったら経験というのはとってもいい経験で、大きくなっても、そういったいい経験を持っている子たちはたくさん本を読むという結果が出ています。

だから、図書館に来ていただいて、本当に楽しい空間で本を読んで、本がある空間が楽しいんだということがすごく必要だと思います。

それが中学、高校にまで伝わって、図書館に入り浸って、社会に出ても図書館に来る。

アメリカの場合、ある調査では、高学歴の人ほど図書館のカードを持っている人が多いということになっています。大学院を卒業した人は、アメリカの場合は8割の人が図書館のカードを持っていて、高学歴の人は、「小さいころから読書は極めて重要だ」と思っている人が多い、という結果になっています。図書館というところで本を読むことが、すごい重要なのだということを高学歴の人ほど思っている。アメリカの図書館は楽しい。入り口のところに雑誌は置いていないです。中に入るとたくさん置いてありますが、調べものの空間だという感じですが、でもイベントも沢山やって児童層は楽しい。

そういった、若い人だとか幼いころから図書館が楽しいんだと感じてもらうために、どこかの図書館でモデル的にやって、それで地域の図書館に広げていく。

**会長** 読書の中身が違うのだと思います。日本の読書と言うと、儒教的な、読書道みたいな「道」になってしまうのですよ。楽しさよりは習練というような、若い子からすると気が重くなってしまうのです。しかもその中身は「ものがたり」や「純文学」が中心です。

だけど、アメリカの読書はそうじゃないです。あらゆる種類の本があって、釣りの本があり、登山の本があり、パソコンの本があり、スポーツの本がありという、その中身が豊富で



楽しいから読む。

そして、読んだことが、アメリカはご存じのように、プラグマティズム、実践主義ですから、それを実社会で試して、スポーツで試して、登山で試して、読書と実生活がリンクしているから楽しいのです。おなじように地域づくりの活動やNPO活動などにも知識や情報を活用してゆく伝統があります。

日本の場合、読書というのは、読書しているうちに閉じこもりになるところがあり、読書だけが独立して、いいことなので本を読みましようみたいになっており、権威的な読書なのです。

そうではなくて、本自体が豊富であって、天文学の本があれば、動物の本があれば、土の本もあれば、木の本もあれば、そういうものを読んで、実際にそれを触って、楽しくて、また本を読む。それがリンクしているから楽しくなって、活動をする。背中を押す読書になるわけです。

そこを間違えると、読書のための読書になるので、それは絶対僕は反対です。読書は本来手段であって、目的ではないはずです。

そこが間違った図書館が余りにも多過ぎるということなのです。全ての人間活動につながっていく読書でなければ意味がない、楽しくもないです。

**大串副会長** 重要なのは、アメリカでもそうですが、例えば山登りとか、若い人たちに読ませる。そしてボランティアの実際に山に登っている人が来て、その本を紹介して、子どもたちがいろいろ質問をすると、こういうふうにやるといいよ、と具体的なところまで教えるわけです。それでアメリカは圧倒的にボランティアの数が多い。いろいろな人が図書館に来ていろいろ教えたり、レクチャーしたり、楽しい空間をつくってやっているようです。

日本の図書館ももっと地域に図書館員が出て行って、そういった人たちを図書館に呼び込む。例えば今、上田の駅前の上田市立図書館でやっていますが、さっき常世田会長がおっしゃったように、コンピューターを教えているのは、それは実際にコンピューター会社をリタイアした人が図書館に来て、実際にコンピューターのことを教えていらっしゃる。その人を中心にグループを地域の中につくって、そういった人たちが検索の仕方を教えている。

そういうのを聞くと、学生が集まるのです。そういう人たちの話を図書館に来て、コンピューターの話だとか、検索の仕方だとか、中身の話までいろいろ聞くと、実際の経験をお持ちの、企業でおやりになった方々だから、大学の先生とはまた違った話が聞けるのです。そうしたことがすごく大切だと思います。

**森委員** 大串副会長に質問ですが、先ほど、岐阜の図書館で留学生たちがボランティアを始めたというお話をなさっていましたが、どのようなことなのですか。

**大串副会長** それは近くの町の5万冊しかない図書館があったのですが、そこは貸し出しも多いし、それからビデオやCDなんかもあっても、仕事量が多い。職員がその図書館は2人しかいなかったのので、そこでボランティアを募集した。

そしたら、積極的に外国の留学生たちが、自分の国でもやっていたから、ぜひやらしてほしいということで、何人も来て、カウンターの仕事などをボランティアがやっていました。

特にヨーロッパ系の学生たちは日本に来て、いろいろなところでボランティアをやりたがりますよね。図書館というのは彼らは好きだから、ぜひやりたいと言う。大学図書館でも、向こうから来た学生たちはボランティアをやりたいと申し出ます。

**澤谷委員** 今、さっき、ヤングの部屋が必要だとか、その世代を取り込んでいくことがすごく大事なことだなと思います。そこに至るまでの小さな子どもたち、今の子どもたちの読書活動、本に親しんでいる状況がどうかと言うと、私は今、小学校勤務ですけど、小学校において松戸では大変読み聞かせ活動は盛んになってきています。それから休み時間の図書室をのぞくと、どんなに晴れている日でも本が大好きな子どもたちはたくさん集まっています。だから、子どもたちが読書から離れているということはないし、そのところは私はすごくいい状況があるんじゃないかと思います。

でも、そこから大きくなっていったとき、そこから中学校、高校に行ったときに、果たして子どもたちが本とどのように親しんでいるのか、図書室とか図書館とかをどういうふうに使っているのかというところは見えないところです。

もしかしたら、例えば中学校ぐらいになると、勉強が大変になって、受験ということも抱えてくると、そうするとそのあたりでひとつ切れてしまう部分というのがあるのかなと思います。

でも、自分の知りたいことを教えてもらう人がいたら、知りたい本があったら、そういう興味、関心というのは、小学生でも高校生でも持っていますから、そのあたりにどう働きかけていくかなという、その図書館が図書館から出て、その世代にどう働きかけていくか。それは学校に行くだけではないのですが、どう働きかけていくかというところも図書館に人を呼ぶ1つの、大事な考えていかなければならない手段ではないかと思っています。

**会長** おっしゃるとおりで、例えば先日の、大阪のほうで男の子と女の子が不幸な目に遭った事件を追っていくと、NHKでもやっていましたけれども、小学生、中学生が、夜徘徊し

ている率がとても高い。つまり居場所がない。そういう子どもたちが図書館の空間に来る。でも、そのためにはもしかすると図書館は遅くまで開けておく必要があるかもしれない。アメリカの大学の図書館は24時間開いていますからね。最後は本当に警備員しか回っていない。でもその空間は開放されている。欧米の教会も、夜中に行っても開いていたりします。ああいうパブリックスペースが必要なのです。子どもたちはそれを求めているわけだし、大人もそれを制御できない。それはいけないことだ、家に帰れと、それだけで済むことではないのですよね。

だから新しい社会のニーズというのはいどこにあるのかというのを分析して、それに対応していく。施設や機関がなければ、落ちこぼれてしまう人が必ず出てきますよね。だから、そういうところに対応していくということですね。

本に親しむというところで、終わってしまうのはとても不思議で、「朝読でパーセントが上がりました、よかった、本に親しんでいる。」とそこで終わるだけでなく、さっきからお話しているように、本に親しむというのはその先があるわけです。目的があるから本を読むわけで、本を読むのが目的ではないわけです。

子どもたちにいろいろなニーズがあることに、本人が気づいて、自分は何をしたいのかということに気づいていくためのヒントになるような読書だったらいいのですが、本を読んでいけばいいやというところでとまってしまったら、それはおかしいと思うのです。だから行動やニーズに対応するのが先であって、結果として読書が出てくればいいですけども、読書が目的になるような図書館空間というのはいおかしいのであって、空間やニーズがまずあって、それに対応する空間機能があって、結果として読書するかもしれない、でもしなくてもいい、と僕は思うのです。その人が抱えている課題を解決する、あるいは興味を持っているものについて、それをさらに進めていく。それを支援するのが図書館です。

だから、ファミレスみたいに入りやすい形になっていって、座りやすい席があって、そこでわいわいしていたら、隣のおじさんが、それについて教えてくれるみたいな。何回も言いますが、塩尻の図書館の空間はそれにはかなり近いところまでいっているわけです。

そうすると、世話をやきたい大人はそこにいるかもしれないし、もう少し積極的なインキュベーション・リーダーと柳澤委員が名づけましたけれども、サポートする大人やボランティアがいて、そのボランティアの新しい活動として楽しいわけです。

今までは公民館に行って、しょうがないから将棋を指していた人が、もともと商社で活躍していた人だったりすれば、何かやれるかもしれない。それからさっき、パソコンの話が出

ましたが、大串副会長も同じ経験をされている。大学生でさえちゃんとしたグーグルの使い方なんて知らないですよ。小中高、大学で誰も教えてくれないですから。ネットの正しい検索の仕方を地域の人に教えるような活動があってもいいですよ。

だって、皆さん何となくグーグルを使っているけど、ちゃんと使いこなせているわけではないです。キーワードのやり方一つ、大学生だって、変な入れ方して、見つからなくてあきらめていることも幾らでもあるし、英語版のグーグルは日本版のグーグルよりもっといろいろな機能があったりするわけです。英語ができる人とできない人で、そこで格差が生まれているわけです。そういうのを教える空間、幾らでもそういう必要性ができるのではないかなと思うんですけど。

**柳沢委員** 松戸の図書館がどういう空間でもって、どういうプログラムになるのかという話をこれから今後していかななくてはいけないのですが、今までの話の中で、多様性というものをどこまで教示するのか。多世代というのものもあるんですけど、常世田会長がおっしゃったように、今までの図書館のように静と動と分けると、図書館は静なる空間だと思われているわけです。

まず当然、静である必要はあるけれども、もう少し図書館というものが、都市的な規模でどういった多世代を教示していく。そこから配信していくということを考えなくてはいけないと思うのです。そのためには、今言ったように、アメリカの図書館にはハローワークのように、そこにコンピューターが50台ぐらい並んで、朝からずっと仕事を探しに来ているという人たちもいます。塩尻の例を挙げると、コンピューターは、朝、子どもたちにまず占有されます。子どもたちは家庭で使えない状況を、図書館で自分の知りたい情報をコンピューターで調べている。

そのように図書館で与える情報や役割が変わってきているわけです。そうなったときに、わくわくするとか、何か楽しめるようなプログラムを一緒にやっていくということが、子どもから高齢者の交流を生む。これから団塊の世代が、15歳から65歳までのエイジ・オブ・ワーキングと呼ばれる働き世代から外されるのですが、そういう人たちがやっていく場所がないわけです。「生涯学習センター」という言葉はあまりうまくないと思いますけど、あそこには行きませんよね。さらに学習しなくてはいけないのかと意地でもいかない。そういうことを図書館がかわりにやっていく。そこでちゃんと交流というか、世代間で交流する仕組みをつくらなくてはいけないと思うのです。

そのために今日は、また話をリセットしてしまいますけど、やはり規模というものと、そ

これから都市計画的な視点で、どういう位置にあるべきなのかということは、本来すごく大事で、なぜかと言うと、例えばショッピングセンターに頼って図書館をつくる場合、ショッピングセンターがあと何年もつのかかわからない。地方に行けば、ショッピングセンターは10年単位で潰れる場合もありますし、都心であればもつだろうと思っている。

日本人はずっと「だろう、だろう」で計画をしてきているのですが、そうではない。例えば図書館がショッピングセンターのかわりになって、街の中に回遊をつくるということなのです。そういうことを踏まえて、これからつくれる場所というのは限られてくると思うのですが、小学校とか、行政とか駅とか図書館というものが一体となって、その回遊をつくるということが、どれほど、街にとってのポテンシャルを上げるかということなのです。それは1つははっきり言えるのではないかと、僕は思っています。

あと、先ほど鈴木委員に明快な答えが1つあるのですが、常世田会長はずっと30万冊の開架から世界が変わるというのをおっしゃっていて、実はここで30万冊の開架を持っている図書館の1人当たりの貸し出し数にはすごく明快な回答があって、例えばこの3番の枚方は44万冊開架ですが、9.1冊。それから藤沢市は、41万3,000冊開架で、9.2冊。豊田市が47万3,000冊開架で、8.7冊。町田市は少し30万冊にとどいていませんが9.9冊です。下段をみると、福山は32万冊開架で、6.8冊。同じように西宮も34万7,000冊開架で、7.4冊。軒並み30万冊を超えているところは、1人当たりの貸出数の平均を全部超えているのです。

ということは、やはりそこに1つの分岐点が見られるのではないかとということです。

もう1つは、実際の都市計画上の中での立ち位置というものがどんな関係にあるか。例えば駐車場の数が実際何台なのかということで、おおよその傾向が見えてくる。数字からだけの話からすると、そういうことが言えると思います。

**会長** 1つ言えることは、今、柳沢委員がおっしゃったように、多様性ということ言うと、相矛盾するニーズが衝突するのです。つまり、若い人はロックを鳴らしてがんがんやりたいだろうし、しかし、静寂の中で何かプレゼンの資料をつくりたいサラリーマンがいたりするわけです。その両方のニーズを満たすためには、ある程度の面積がないと、その区分けができないです。

その静寂性と騒音性と、両立させるには狭い空間では無理なので、そういう意味では最低限の広さというものが重要だと思います。

それから今日も実は午後、浦安に20人の視察団を連れて行ってきたんですけど、浦安はついに今年度から、月曜休館をやめて、ほぼ無休になった。この表で言いますと、面積5,300

平米、70万冊の蔵書があって、開架は30万冊です。人口は16万人ということもあり、1人当たりの貸し出し数が14冊です。今度、大規模改築をするに当たって、増築をして、そこに浦安が唯一欠けているラーニングコモンズみたいなものをくっつけようかということを考えている。それ以外はラウンジみたいなものも増築しましたし、ほぼ要求を満たしているのです。自由に人が交流できて、大声で話し合いができるような空間を増築できたらいいということで、今検討しているのです。

だから、松戸の図書館を考えるにはそのくらいまで考えて、日本一の図書館ができればいいと思います。

**柳澤委員** 技術的には音の問題というのはかなり解消されていると思います。音楽練習室といって、ロックをばんばんやるような部屋が図書館の上にあっても鉛の部屋で包むようになってるので、ほとんど外に漏れない。逆に言うと、すぐそばでは音がするので、逆にその音が心地よくて、子どもたちがその周りに群れて、勉強しているという現象にもなっています。

ですから、図書館は絶対静かでないといけないということではなくて、その音の問題は技術的に解決できる時代になってきている。むしろ、そのバランスをどうとって、ある程度賑やかなイメージを持った空間、静かな空間だったりする。多少騒いでもいいという分類が、多様な空間の性質を含めて必要と思います。

**会長** それ以外に、今のアメリカの図書館では、実際に実施している図書館、これからやろうという図書館をあわせると、70%以上がやろうと言っていることが、いわゆるファブリケーション・スペースと言って、メーカーズ・スペースとも言いますが、3Dプリンターやカットマシンというものをつくる機械を置いて、そこで大人と子どもと一緒に何かをつくっていく。それはもちろん、そのためにいろいろなデータベースや本を使ってやるのですが、アメリカは日曜大工の国ですから、当然と言えば当然ですけど、そのうち写真を見ていただくチャンスをつくりたいのですが、開架室の中に本棚も取っ払って、そこに工場みたいな囲いをつくって、そこにそういう機械を置いてやっている図書館もあるぐらいです。

3Dプリンターと言うと、日本では際物みたいな扱いはあるのですが、そうではなくて、もっと裾野が広いのです。そのためにはいろいろな情報を調べなくてはいけないし、今までないようなものもつくれるし、重要なことは今まで一定の技術がなくては使えなかったものが、パソコンを使って、パソコン上のソフトを素人が使って、難しい形をつくっていけるということが可能になっている。そういう時代に実は突入しているわけです。

日本でパブリケーション・スペースに集まってくる人たちというのは、まさにリタイアし

た中年の人たちが多いことが特徴だと言われていますが、今までなかったようなものをつくっていく喜び、要するに、日本の団塊の世代の人たちは、それだけのエネルギーと知識と経験とレベルを持っているわけです。ところが、その人たちが活動できるというのは、さっきお話したように、地域の中で行けるのは公民館ぐらいで、そこでやっているのは老人教室で、用意されているのは囲碁の盤ぐらいしかない。

それがいかにおかしいかということに気づくべきなのです。本当に新しいことを立ち上げて、あっと驚くようなことをつくれる人たちがいっぱいいて、それをやりたくてしようがないのだけど、受け皿がない。若い人たちもそうだし、子どもたちもそうなのです。

何かもっとあふれ出るような何かをやりたい気持ちはあるんだけど、受け皿がない。何か山奥の限界集落ではないんですから、そこを受けとめる施設をつくらないと、うそだと思うのです。

私たちが想像できないような空間を準備したら、そこで私たちが想像できなかった活動が生まれくるようなものでないといけないと思います。

私たちが予想できるようなものでは恐らく失敗であって、大人と子どもたちが一緒になって、何か新しい活動が出てきて、それを見たくて、いろいろなところから人が集まってくるような文化活動という名前ではおさまり切らないものが生まれてくるスペースにできたらいいと思います。

**大串副会長** アメリカでは企業がお金を出します。お金集めの面でも、流れが違います。

**会長** そうですね。

**大串副会長** 企業などから寄付を集めていろいろなことができるようにするということも必要だと思います。

ニューヨーク市の分館に、私の教え子が近くに住んでいた時の話しですが、子どもを連れてアメリカに行って、旦那さんは働いて、自分はずうにいて寂しい。そこで図書館に行ったら、毎日いろいろな集まりがあって、そこに行く友達もできるというので、赤ん坊を1人抱えて、2年ぐらい楽しい生活を送ってきて、日本に帰ってきたら、図書館がアメリカと違う。

アメリカでは図書館員や、そこにいる人がコーディネーターになって、いろいろな人と人との関係も仲立ちしてくれて、お母さんたちのグループができていき、とてもアメリカの図書館は楽しい空間だと言っていました。

それは外国に行かれた方はアメリカに行った人も、イギリスに行った人も、日本に帰って

くると、「図書館って何でこうなの」という言い方をする人がいます。

**会長** 図書館員自体も変わらないといけなくて、日本の図書館員というのは人とつき合うのが苦手で、本が好きだから図書館員になるのです。

今は大串副会長が言ったように、コーディネーターでなくてははいけません。人と人をくっつけるのが楽しいからなるのでないとまずい。職員の問題もいずれは議論しなくてははいけません。今日は施設の話を中心にさせていただきました。

皆さんにはいろいろ理路整然と踏み込めないようなところまでイメージをふくらませていただいて、議論していただいて、とてもよかったですと思います。先ほど面積がどうだというリクエストをいただいたわけですが、それについても明確な話ができないまま、今日は時間がきてしまい、申しわけないのですが、最後に何かありますでしょうか。

**鈴木委員** 今日、皆様方のお話を承りまして、教育委員会として、いつまでもいたくなるような図書館像、今ある図書館とは全く違う小さいお子様から、お年を召した方たちまで、皆さんが集えるような、本当にいい図書館にしていかななくてははいけないなと思っております。今後、委員の皆様からいろいろな力を拝借して、松戸市に人が集えるように、他市からも多くお越しいただけるような図書館にしていくという思いがございますので、またぜひ皆様方のお力を拝借しながら、いい図書館をつくらせていただきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

---

#### ◎その他

**会長** 事務局から、その他についてありますか。

**事務局** 委員の皆様、本日も大変貴重なご意見をありがとうございました。

柳澤委員、プレゼンテーションをありがとうございました。

まだ、皆様のご意見がたくさんあると思いますけれども、後日、事務局まで任意の形式で構いませんので、ご意見をいただけたらと思います。

次回、第4回の審議会の日程についてでございますけれども、11月9日の月曜日、午後3時から、こちらの5階会議室で行う予定となっておりますので、よろしくお願いたします。

以上でございます。

---



◎閉 会

**会長** それでは、以上をもちまして、第3回図書館整備計画審議会を終了いたします。

どうもお疲れさまでした。

閉会 午後7時10分

この会議録の記載が真正であることを認め署名する。

図書館整備計画審議会副会長

図書館整備計画審議会委員